

## 第2章 部局のトピックス



## 第1節 看護学科創設に当たって（座談会）

山崎高應（前学長）  
 片山 喬（副学長）  
 高久 晃（医学部長）  
 鏡森定信（医学部教授）  
 飯田憲郷（元庶務課長補佐）

（司会） 本田 昂（医学部教授、前附属図書館長）

（平成7年3月28日）

**本田：**本日は、お忙しいところご出席いただきましてありがとうございます。

本年10月に開学20周年記念式典が挙行されるということで、それに合わせて「開学二十周年記念誌」を編纂することになりました。その中で、最近10年間の歩みのうち特に記録にとどめたいこととしまして看護学科の創設ということがございます。それにまつわる座談会を行い、記録に残そうということが昨年の編集委員会で企画されました。当時、図書館長であり編集の責任者でありました私が、今回の座談会の司会を仰せつかったという経緯がございます。看護学科創設に当たりまして大変ご苦勞なさいました皆様にご出席いただき、今だから話そうといったことも含めましてお話をしていただければと存じます。

座談会の進め方としまして、まず初めに準備段階、次に現況、そして将来構想というふうにしたいと思います。

それでは準備段階のお話から伺いたと思います。聞くところによりますと本学創設の準備段階で、既に医療技術短期大学の基本構想があったようですが、そのあたりから、当時の本学創設準備委員であられました山崎前学長にお願いいたします。

**山崎：**昭和49年の9月ごろ富山医科薬科大学創設という話が事実上決まった時に、やれやれよかったとのんびり構えていたんです。ところが文部省から「早く準備を進めない



と昭和50年度には出来ません」と言われた。それで10月半ばごろから基本構想を練った。これは、第13次案まであったのですが、中身はほとんど変わらないんです。それは医学部、薬学部のほかに医

療技術短期大学部を置き、医原病といったものの研究施設なり研究所を作るというものでした。ところが、本学だけではなく、新しく医科大学を申請していたところや文部省が一番懸念していたことは、“看護婦の確保ができるか”ということだったんですね。文部省に看護学科をもつ医療技術短大を作るつもりがなかったんですね。そうすることで、看護婦をどうするのかということになった時、いや富山県は看護婦の養成県なんだ、だからそんなに無理して医療技術短大を作ってもらわなくともいいんだ、ということだったらいい。それは富山県ばかりでなく、佐賀も島根もそうだったようです。しかし、我々としては将来的にはやはり作ってほしいと、基本構想の中に入れたんですが、昭和50年の1月末の段階で文部省から「この基本構想中の医療技術短大は外してもらえないか」と言われた。そういういきさつが当初ありましたね。

そして、現実の問題として出てきましたのが平成3年なんです。平成3年7月になって、以前本省におられた押田元事務局長から「看護学科創設をやられますか」と。

**本田：**そうしますと当初設置準備委員会のほうでは、医療技術短大の敷地さえも一応決まっていたようなことを聞いておりましたが、文部省にはその気はなかったと。それがまたどうして今回看護学科創設という話になってきたのですか。

**山崎：**本学とすると、私は昭和63年に学長にさ

せていただいたんですが、坂倉看護部長が63年に退官される時に挨拶に来られて、「先生、私たちとしては4年制の看護学科を作ってもらいたいんです」と。「我々は、医療技術短大を作ってもらいたいと言っているのだが、それはどうしてか」と聞いたら、「これからはだんだん医療が高度化していく、病態もいろいろ変わってきている。そうすると今までの短大制の看護学校では追いつかないんです。だからちゃんとした看護学の知識を持った人でないとこれからの高度医療を支えていくことはできない」というわけです。「そんなことを言ったって、そんな学歴の高い人といったら、地元の各病院なり個人の病院では使ってもらえないでしょう。しかも、富山のほうは看護婦の養成県だということを前々から知らされているんだ」と。そうしたら坂倉看護部長は、「いや、看護婦養成県であるからこそそういう人が要るんです。というのは、4年制の看護学科を出た人というのはいわゆる指導者で、近年たくさん看護学校がありますが、そういう所の教員、指導者が必要なんです」と。「看護婦養成県であるからこそそういう高度の学力を持った人も必要なんです」とおっしゃるんですね。私は、「それはいい話だ、それならよくわかりました」と言った。それが63年です。

それと相前後して、今度は県医師会長の広瀬さんが来られて、「我々は北陸3県の医師会の中でどこが先に看護学科を作ってもいい、それには協力しようという話し合いができていますので、富山が名乗りを上げればそれに対して協力してもらえるはずだ」と、こういう話だったんです。「それならやりましょう」と。そう言いながらも紙の上だけの構想じゃ困るので、「当然のことながらどういう学科どういう講座を作るのか、そういうことを決めなきゃならない、教員の定員は決まっているかもしれないが、その中身、問題は教員になる人がいるかどうかなので、具体的にこういう人がお

りますというようなことでないと、なかなか簡単には通りませんよ」と言いました。

**本田：**準備段階での短期大学構想が、医療看護の専門化あるいは細分化並びに高度化ということを背景にしまして、本学に看護学科を、という話に進んできたわけですね。先ほどお話にありましたように、文部省からの打診は平成3年であったそうですが、それ以前にも概算要求として、当時の片山医学部長のほうからお出しになっていたというふうにも伺っておりますが、その辺のお話をお願いいたします。

**片山：**私は、62年11月から医学部長になったわ



けですけども、その前のことは実はあまりよく知りません。建学当時については、今、山崎前学長がお話されましたとお思いますけれども、やっぱりそうした構想がそこで議論されたことが生きていたと思うんですね。

そして、やはり短大はだめで4年制の学部でなければいけないという話は医学部教授会でもだいぶ前からありました。そこでは、要するにコメディカルの学部を作りたいという話がだいぶ出ておったと思います。それは少なくとも概算要求の項目に出ていたわけです。

もうひとつは、全国的な看護婦不足に目が向けられてきたことがあります。その当時、「地方医療圏」が作られたため駆け込み増床というのが起こって、したがって関東地方などでは極端な看護婦不足が生じたという事実がありました。これも山崎前学長がおっしゃったことですけども、看護婦を高学歴化しないと人材が集まらないということから、やはりどうしても4年制の学科を作らなければいけないということになりました。

もうひとつは、市か県の医師会報の何かの委員会報告の中で、医薬大は他で養成した看護婦をとっていく、どうして自分たち

で養成しないんだ、というふうな話が出ておりました。これは教授会でも私が披露しましたので、皆さんご存じだと思いますけれども、もちろんそれは当たっていると思うんですね。直接に医師会からとってこないにしても、他のところからとってきて、そのあとにそういう人が移っていくということですから。やはり我々はそういうことを言われないようにしなければいけないということがありました。

先ほどお名前が出た坂倉ナミさんが力を入れ、県の会議等の方でおっしゃって下さったということも非常に大きかったと思います。また、これも話に出ました当時の広瀬県医師会会長が非常に理解を示して下さいました。県知事も非常に理解を持って、むしろ積極的に我々の尻を叩いてこられ、たしか、参与会でもそういう話が出ました。そういう状況を背景に平成2年の秋だったと思いますけれども、医学部の教授会で4年制の看護学科を作っていこうということになり、まずプロジェクトチームを作ろうということが決まりました。

**山崎：**平成2年といたら、その翌年の7月に文部省から打診をいただいていますので、その半年ほど前なんですね。

**片山：**実は平成2年からではなかったかと思うんですけども、学長が概算要求を出す時に各学部長にヒアリングをされるようになった。その時に私は、医学部としては看護学科設立をやりたいんだということを言いましたところ、学長にはちゃんと聞いていただけました。

**山崎：**あの時、山形大学もやっているというふうな話もありましたね。

**片山：**あそこはまだやってなかったんじゃないかと思いますが。平成2年12月21日に、ここにもありますけれど、看護学科設置のためのプロジェクトチームを初めて作りましょうということで、仮称打ち合わせ会というのを持ちました。その時に出られた方は、山本教授、伊藤教授、鏡森教授、佐々

木病院長、堀井看護部長に当時医学部長の私です。そこで会の名称を「看護学科設置検討委員会」として委員長に鏡森教授、副委員長に堀井看護部長ということで発足したわけです。

**山崎：**それが半年後の平成3年7月に文部省へ行った時に、翌々年の平成5年からやるかという話が出たわけですね。

**片山：**その時から鏡森委員長には中心的な役割を情熱を持って果たしていただき、堀井看護部長ともいろいろお話しいただいて出来たのがこの「富山医科薬科大学における医療関連科学、特に看護学教育研究のあり方に関する報告書」という冊子です。こういうものを作らないと、うちの大学の上の人にも文部省にも聞いてもらえないということでした。

**山崎：**それが平成3年4月でしょう。

**片山：**ちょうどその年の6月に新設医科大学の医科大学長・医学部長会議があったんですが、文部省の医学教育課長も来ておられました。この時、「筑波大学は医療短大を持っているが、他の大学は共通して看護婦養成機関を持っていないはずだ」と言いました。我々としては、「ぜひ作りたいのでよく話を聞いて下さい」と言ったわけです。その時には何も言われなかったけれども、その1月位後にさっき言われた電話が山崎学長のところにかかってきたというのが経過です。

**本田：**そこで、さきほどの報告書についてですが、鏡森教授、基本構想の策定あるいは学内準備組織作りということからひとつお話を承りたいと思います。

**鏡森：**今お話がありましたように、どういう教育をするかという教育理念と  
いいでしょうか、どういう人材を養成していくのかという骨子を早く作らなければいけないということで、それがこの設置検討委員会の主な仕事になっていったわけです。も



ちろん施設をどうするかというお話もございましたけれども、この設置検討委員会の中心課題は、この後準備室になってから、私が教育課程の委員長になっていくわけですが、「富山でなぜ」というさっきの話と、「どういう看護教育をここから発信していくのか」ということであつたと思います。そこでいろいろ議論して、先ほど紹介があつたメンバーで、各自の担当部門をこういうふうに書いていきたいと思いますというのを片山学部長が大体割り振って下さいました。その案が大体固まってこれでいこう、という10章の手書きの原稿が仕上がったのが、私の記録によると平成3年3月26日ということです。

その時にフレームとしては、これまでの日本の看護教育の中でミニマムの条件が一応仕上がっておりましたのでミニマムの条件だけということではなく、それにどういう大学教育の内容を付加していくかということで考えたのが、この後出てくる「人間科学」ということになります。このあたりについては、いろんな言葉がありました。ヒューマン・ヘルス・サイエンスとかヒューマン・サイエンスとかいろんな言葉が案として検討されました。このような経過をふまえて、「本学は、看護教育に人間科学という基軸を入れる」という構想ができあがっていきました。

今回は確かに看護なんですけど、私たちの頭の中には将来それを医療関係の技術者を養成していく場合にも共通する基礎科学と言いましょか、そういったものをこの際準備していこうという考えがありました。後で出てくる情報化社会ということのを頭に置いた「統計情報科学」。それから、人間の行動の基礎的なものを押さえてもらうということで「行動科学」。また国際化なり科学的な交流ということで「外国語」。この頃はまだ、英語というふうに断定はしてありませんでしたけれども、そういうもので「人間科学」というものを打ち出して、

医学科を含めて将来の医療人全体にこころあたりを強化していくんだという視点があつたと思います。

ともあれ、正直言いましてそんなに早く事が展開するとは思っておりませんでしたので、1年か2年かけて検討すればいいんだなと思って書きあげたわけです。ところが今もありましたように、私たちのビハインドでは、片山学部長と山崎学長がかなり先のところを走っておられたということになります。概算要求までとにかく白いものに黒いものを置いて仕上げるんだということで、このメンバーでそれぞれが分担して書いたという記憶が残っております。

**本田：**学内準備組織の体制が整い、基本構想が策定され、その頃から対文部省交渉が始まるわけでございますけれども、事務局では飯田元庶務課長補佐が担当されましたね。対文部省交渉を中心にして、ひとつお話を承りたいと思います。

**飯田：**看護学科の関係で文部省に最初に行ったのは、平成3年8月上旬でした。その時は、片山学部長、吉田総務部長とご一緒して医学教育課に行ったんですが、課長補佐から看護学科の設置に必要な看護系教員数、修士課程設置に必要なマル合



教員数等についての説明と修士課程に耐え得る看護系教員の早急な確保について指導がありました。それから設置準備が終わった平成5年3月まで文部省には何度となく足を運びました。平成4年4月頃までは学生定員、養成職種、教員組織、看護系予定教員について、平成4年5月からは教育課程、設置理由、指定申請書等を中心に相談に行きました。文部省から特に指導されたことは、修士課程を前提とした看護系教員の確保、すなわち、マル合教員の確保、カリキュラム及び教室の確保です。平成4年3月頃になって予定教員候補者の中から何人かの辞退者が出て、その補充の候補者の

個人調書を持って行ったところ、「教育課程等の検討に入らなければならないこの時期になって看護系教員組織がこんな状態では困る」と言われた時は設置がうまくいくのか不安になりました。

**本田：**いろいろ対文部省交渉でご苦労があったと思います。当時、たしか先発校としていくつありましたね。

**山崎：**ちょっと私はよくわからないんだけど、佐賀とか山形というのはどうなんですか。

**片山：**山形も富山も医療短大以上の看護職養成機関がないということ、佐賀もそうです。本州では、山梨と山形と富山だけがなかったんです。あと、ほかは大部分とか宮崎などありますけれども。

**山崎：**あれは、押田元事務局長が医学教育課の指導室長をしておられたから、看護学科創設をやるかと言われたのかな、多分そうじゃないかな。

**片山：**はじめ、医学教育課の課長補佐にはこちらもそういう意思があるということは、十分伝えてありました。

**山崎：**それで押田元事務局長に「おやりになりますか」と言われて電話が入ったんだろう。

**片山：**とにかく報告書を即座に文部省に配ることができたというのは、大きかったと思います。

**本田：**そこで対文部省交渉で報告書が非常に大きなウエイトを占めてくるわけでありますけれども、ここで設置に当たっての幾つかのポイントについて、先ほどご説明がありましたけれども、例えば教育目標、学科の特色、講座の内容をどうするか、あるいは学生定員の問題、教員組織、教科の内容ということについて、鏡森教授にここでまとめていただけますでしょうか。

**鏡森：**私の手元の記録によりますと、そういう教授会でのコンセンサスづくりをしていた後、今申し上げたように教員組織と教育課程の準備は並行して進んでいくわけ

です。私のほうは教育課程専門部会の担当でありまして、平成3年11月4日の看護学科設置準備委員会の中の教育課程専門部会で、「健康科学または人間科学、基礎看護学」をひとつの柱にし、2番が「臨床看護学」、3番の柱が「地域老人看護学」という骨子が先ほどの検討会の流れを踏まえながら、徐々に明らかになっていきました。この頃はまだ健康科学または人間科学という言葉を使っていました。ご存じのように東大は、その後健康科学を使うことになるわけです。その時強調されたことは、医と看護学科が共同で教科内容を強化していくんだということです。看護学科は看護だけで、医学科は医学だけではなくて、医看共通の講義を導入するということなども言っていました。それでは、この人たちは社会に出てどういう貢献ができるのかということで、先ほどありましたように、ゼネラルなものを押さえながらスペシャリストとしての教育者、現場のリーダーそして研究者といった3層からなる人たちを提供していくんだということでした。

また、この時だったかどうかよく覚えていませんが、もう既にこういう学科を作る時には、マスター、大学院を考えて人材なり教育課程を整備しておくようにという指示を聞いておりました。今言いましたように、看護の教育、臨床、研究とこういった3層のものにおいて貢献できる人材を作っていくということで、最初から大学院も視野に入れながら人材を育成するということになりました。そういった骨子が大体出てきますのが平成3年11月でございます。

**本田：**そこで講座としましては人間科学、基礎看護学、臨床看護学、地域老人看護学という方針が出たわけでございますね。そこで修業年限は4年でございますけれども、定員についてもこの頃から話し合いがあったわけですか。

**片山：**定員は文部省の指導に従って、初めは60

人という形でした。ところが、一時50人という話がありまして、それで急遽、教員の数も減らさなければいけないとか、いろいろな問題があったのですが、結局、60人となり、それで3年目に編入学10人というふうな形に落ちつきました。定員が10人違いますと、教員が3人ぐらい違いますので、声をかけている人も来ていただけなくなったら大変なことになりますので。



**本田：**それでは少し話を進めさせていただきま  
すけれども、このあたりで事務局、特に準備  
室担当の飯田さんがいろいろご苦労な  
さったところも多いかと思いますが。

**飯田：**この年、庶務課は大きなプロジェクトを  
2つ抱えておりました。1つは自己点検、  
評価に本格的に取り組まなければならない  
ということで検討委員会が設置され、点  
検、評価項目やその体制等の検討がスター  
トしました。もう1つは、薬学部が平成4  
年秋に創立100周年を迎えるため、その記  
念事業の準備が本格的に始まりました。そ  
こへ看護学科の設置準備の話が突然飛び込  
んできたわけで、特命のようなかたちで私  
が看護学科の設置準備を担当することにな  
りました。最初は、簡単に考えていたのだ  
ですが、広島大学や東京医科歯科大学の設置  
準備の話を聞いたり、準備を進めていくう  
ちに、片手間ではとてもできないことが分  
かってきました。それで、本来の自分の仕  
事を他の職員にやってもらい、設置準備に  
専念しましたが、大変迷惑をかけ申し訳な  
かったと思っています。

**片山：**本当に飯田さんには、よく頑張ってもら  
いました。

**本田：**皆さんのご協力のもとに、平成4年6月  
ごろ最終的な設置資料が提出されたように  
伺っております。

**飯田：**平成4年7月初旬に概算要求書が、また  
8月初旬には設置計画書が、それぞれ文部  
省に提出されました。文部省からは、常々  
「3大学とも予算要求するかどうかはわか  
らない」と言われておりましたので、文部  
省から大蔵省への概算要求に本学の看護学  
科設置が盛り込まれたということを知って  
ホッとしました。

**本田：**ところで、高久教授は平成3年11月医学  
部長になられましたね。

**高久：**そうなのですが、平成4年の1年間とい  
うのは準備期間であつたわけですか。

**片山：**要するにこれでやれと言われましたが、  
やっぱり医学部教授会の承認を受けなけ  
ればいけないということで、平成3年8月15  
日に臨時医学部教授会をやり、承認をして  
いただいたんです。その後11月からは、理  
解のある高久学部長にやっていただいたの  
でうまくいったと思います。

**高久：**学部長の仕事の全体がよく分からないう  
ちに、すぐ「看護学科」でしょう。しか  
し、それまで学部長だった片山教授が準備  
室長としておられたので、片山教授、山本  
教授、鏡森教授らが主になってやられたわ  
けです。

**本田：**そこで高久学部長が準備委員長に。

**高久：**学部長になるとそうなのですが、最初  
のうちはよく分からなかったけれど、片山  
教授が準備室長でおられたから助かりまし  
た。それでやっと看護学科というのは何か  
ということが、少しずつ私にも分かってく  
るんですね。それでともかく勉強していっ  
て、結局1年以上いろんなことをやったん  
ですね。教員を決めるとか。それで入学式  
を迎えるわけです。高間教授とお会いした  
のは、平成4年の春頃かな、あの頃2、3  
回予定教員会議を通じて今の教員の方々が



少しずつ分かってきました。

**山崎**：平成4年の秋口でしょう。

**片山**：ちょうどここにその時の写真が1枚あるんです。平成4年11月です。山崎学長を真ん中にして予定教員がみんな出てますよ。

**高久**：準備委員会の実際は、片山教授が中心になっていただいて。

**本田**：皆さんで協力なさって、いろいろな人選等についてのご苦労があったという時期がほぼ1年近くあるわけですが、そのあたりをもう少し具体的にお話し下さい。

**高久**：その頃、片山教授や鏡森教授の優秀な教員を集めるその能力は大したものだと思います。特に私はそういうことは全く分からないから。それでもだいぶ苦労されて、二転三転したりいろんなことがありました。



たしか、来るべき人が来なくなって、また別な人を探したり…。

**高久**：結局は、専門の看護学科の教員の席がまだ無かったので、いわゆる弾力的人事をやるということで、神郡教授と高間教授の2人が先に来られた。

**片山**：それと、やっぱり県内からいい学生をとりたいということで、これは平成3年1月25、26日に私と高久医学部長で新川女子高校とか高岡女子高校など数校を回りましたね。

**鏡森**：26日は片山教授と私が2人で富山中部高校、富山東高校、富山南校、富山高校、富山女子高校などを回っていろいろ話を聞きまして、ああいうのは非常に後で参考になりましたね。回っていろいろ聞いたことは、本学についてどう考えているか、本学の看護学科をどう考えているかというのがよく分かりました。よそから見ないと、自分のところだけ見ていると分からないことが多かったと思います。

**山崎**：高等学校と大学との間の懇談会がありましたが、あそこにも高等学校側からいろん

な話が出ましたね。高等学校の校長さんたちは非常に関心を持っておられましたね。

**本田**：そこでいよいよ学生受け入れということで、第1回入学式は平成5年4月22日に大講義室で行われました。



さてここまでが、準備期間ということで、これから現況のほうに話を進めてまいりたいと思います。先ほどのお話の中にもございましたけれども、本学の看護学科の特徴ということを授業内容、研究内容の面から、鏡森教授、まとめていただけませんか。

**鏡森**：申し上げましたように、薬学部にも、看護学科を開設したことがいい効果を生むようにという、大学全体の教育を今日的な要請というのか社会的なニーズに合ったものにしていこうという意気込みがありました。

そこでさっき申し上げたように看護の方たちのご意見も聞いて、人間科学の導入は薬学、医学にとってともに教育の強化につながるだろうということを看護の方たちにも支持していただいて、そして人間科学という言葉も決まって、人間科学を構成する教育科目としては行動科学と統計情報科学、そして最終的には国際語の英語ということになりました。一般教育の方たちにもこの辺をよくご理解いただいて、薬学部、医学科、看護学科の共通講義などでもできるようなシステムを模索いたしました。特に医学科と看護学科における共通講義ですけれども。しかし統計情報などに関しては、薬学の教育の中にも必要だし、薬学の方たちがどんどん臨床に出ていかれる際に重要なものとなります。そして予防薬学だとか、そのためのコンサルテーションですね、服薬指導とか、薬学の人たちにとってもカウンセリングが非常に重要だという時代的な背景もあって、行動科学が今日的な基礎専門科目としての意義が承認されていく過程があったと思うんですね。

集まっていたいただいた教員の皆さんが、いろいろ困難な中から来ていただいて、そういったものの強化に力をお貸しいただくことになっていきます。基礎看護の高間教授、臨床看護では生命倫理、ターミナルケアも含めて澤田教授、精神保健という、これも今日的な大きな課題で神郡教授、高齢化社会の重要課題である小児の看護ということで湯川教授に来ていただきました。また、地域のほうは村山教授という東京の医療短大を作る時から関与しておられた方に来ていただいたということです。その後、さらに本学にとって将来を見据えると、少子化時代で母性の問題はやっぱり大きなウェイトを占めていくだろうということで、片山教授の強いご指摘もありまして、堀井看護部長の協力を得てさらに母性を強化することになりました。このことがその後の塚田教授というベテランの確保として実を結ぶことになりました。そういう時代を見据えた教育課程が、人材も得られて準備されていったというふうに考えております。

**本田：**教員はやはり教育のほかには研究が求められるわけでありまして、それが将来の大学院構想にもつながってくるわけですね。そこで、今医学部長が大変ご苦労なさっておりますことは、看護学科教員における研究の推進ということでございまして、これは後ほど話を進めます大学院にもつながる問題でありますけれども、ご苦労の一端をお話ししていただけないでしょうか。

**高久：**一般論的な言い方をすれば、我々医学部しか知らなかった者にとっては、いろんな新しい体験というのが結構ありますよね。目下、努力中ということで、そのぐらいにとどめさせておいて下さい。

**本田：**そこで昨年12月、第1期工事の建物が完成したわけでございまして、大変喜ばしいことに第2期工事にも着工しているわけでございますね。

**高久：**そうです。大学院はその後です。

**本田：**平成8年の春ぐらいに。平成7年度に第

2期工事が完成して、一応看護学科の完成をみるということなんですね。そこで教員は平成7年度で全部揃われるわけですか。

**高久：**平成8年度が完成年度で医系教員が増えるでしょう。

**山崎：**看護学科に相当する事務系職員の定員はいつになるんですか。

**飯田：**教員定員については、学年進行計画に基づき、学生の教育に支障がないようにきちんと措置されますが、事務系職員については、学年進行計画があるものの修正減や繰り延べなどのため、そのとおりにはなりません。定員削減の折、厳しいのではないのでしょうか。

**山崎：**繰り延べになるのは分かるけれども、最初につけてもらう定員というのは？

**飯田：**どれくらい定員措置されるか分かりません。先程も言いましたように学年進行計画はありますが、事務系職員には修正減や繰り延べがありますから、実際に定員がついてみるまでわかりません。

**山崎：**それは事務の定員だからあってないと言いかもしれないけれど、基本的には、例えば山形大学に初めて医学部ができたのが昭和40何年だったか、あの時に学生定員100人に対して事務職員の定員は20名ですよ。100人に対する事務職員というのは20名が基準ですよ、その当時。だから私は、今のこの看護学科は4年でしょう。医学科と看護学科で4年と6年の違いはあるんですが、学生定員が60人ぐらいだとすると、10人ぐらいはつくと思うんだけど。つけた上で定削は定削で行っていくと。例えば、本学ができた時に、新設医科大学の事務職員の定員は総定員の枠外だと言われた。枠外でくくられていたけれども、結局、枠外がよかったのか、枠内がよかったのか分からないんですよ。新設医科大学というのは、恐らく定員は枠外だと言いなから、従来の基準よりもはるかに少ないぎりぎりの線に置いておいて2割、3割定削をやっているわけですから非常に困っている

わけですね。

飯田：先発大学に事務系職員の定員について聞いても教えてもらえませんでした。

高久：先発大学にまだ事務職員はついていないという話は聞いています。

山崎：それがね、広島とかと本学はまた違うんですよ。だから、決してそんなに十分にはつかないと思うんですよ。それでも10名ぐらいはつくんじゃないかな。学生が増えてるんですからね。

高久：そうですね。授業料をもらっているんですからそのサービスはしなきゃならない。

本田：ところで、全国で4年制の看護学科というのは何校ぐらいございますか。

山崎：毎年2校ほど出来ている。

高久：今年は2つしか出来なかった。国立は今年3校が設置要求したけれど、2校しか出来ない。そろそろ文部省も、設置条件の整わないような看護学科の設置要求に対してはだめにする場合があるということですかね。

本田：修士課程の大学院を設置している大学というのは数校ぐらいですね。

山崎：千葉大学はもちろんある。

高久：広島大学が今年のヒアリングで判定が出ます。オープンとなれば来年からということですよ。本学の1年先を行ってますから。

本田：そういうことは、博士課程になりますともっと少ないのですね。

高久：国立は千葉大と東大ですかね。



本田：そこで、本学の看護学科の将来構想として、修士課程はもちろん博士課程も設置したいというわけがございますけれども、そ

の辺に關しましてひとつお話しただけですか、鏡森教授。

鏡森：先ほど申しましたように、本学を設置し、人材を提供する時に、マスターというものがなければ、少なくともさっき言った研究スタッフが養成できないことになります。

本学の場合は大学の大綱化という流れと、マスターが出来ていくという流れと、薬学部があるという3つぐらいの要素で考えていかなければならないだろうと思いますが、いずれにしてもマスターでは看護がコアになります。そして今の学部教育にマスターを作ることによって、より高度の臨床的な看護、看護研究、そういったものが本学の学部教育を基礎にして展開できるというところの特徴を出す必要があります。

それについては今年の概算要求で、一応内容を打診していくことになりますから、これからが正念場じゃないでしょうか。看護系の教官が中心になって、これまでの経験を生かしながら検討し、書き上げるという段階だと思います。

山崎：それはまあ看護学科もどれだけ看護学専門の先生、そういう人たちにマル合がおられるか、修士講座だってマル合になるんだろうと思いますけれどもね。要するに、教授のマル合がつかないとだめです。

本田：高久教授には、医学部長としても大綱化に伴いいろいろ大学院大学の構想もあると思いますけれども、看護学科もそれに参画するような考えもあるわけですか。

高久：看護学科に関しては、医科薬科大学全体の大学院問題と関連づけさせるとかえって看護学科が迷惑する場合もあり得る。それで修士課程そのものは今、看護学科単独でやっていこうということになっています。

鏡森：あれはオフィシャルなものじゃないですが…。

高久：看護学科修士課程の準備についての懇談会を始めています。

山崎：やっぱり看護学専攻を作るんでしょう。

医学部の場合は大学院は専攻が4つあるんですかね。医学研究科何々専攻と。

山崎：看護学科の場合は、医学部だから医学研究科看護学専攻ですね。

高久：医学系研究科看護学専攻です。

山崎：今は？

高久：今は医学研究科です。それが今度は医学系となるでしょうね。看護学研究科とはならないでしょうね。

山崎：看護学専攻でしょう。

高久：東京医科歯科大と同じようになりますね。

鏡森：さっき広島大のをちょっと聞いたら、東京医科歯科大や千葉大の流れで大体作りましたということでした。

本田：将来、こういう医療技術者の例えばOT、PTとかそういう人たちの養成も加える可能性はお考えなんですか。

鏡森：いや、お考えというより、厚生省では2005年で医師が1万から2万人過剰という計算をしていますから医学部の定員も削減されるでしょう。そうすると教育機能として医療総合大学でスペシャリストを作っていくという分野を広めていって、本学の基本的な力を維持していくというふうにせざるを得ないと思いますよ。どういうことをやっていくかは別として。

本田：そうすると当然、作業療法士なども視野に入れていくわけでしょう。

鏡森：どうなりますかね。

高久：基本構想で、今からでしょうね。

鏡森：これからどういうふうに脱皮していくかという、それはもう国は医学生の方定員を絶対に絞っていきます。

本田：そうするとその辺のほうも開拓しなくちゃならないという問題、分野かもしれないですね。

鏡森：その可能性もひとつありますね。

本田：ほかに何かお話しおきいただくことがございますでしょうか。

片山：とにかく、今回に限らず、医学部の発展というのは、やはり先見性を持って見ないといけないのであって、それには、どれが

正しいか、それをよく見きわめることが大事だと思いますよ。理念だけじゃなくて、どれをやったら一番社会のニーズに合うかということを常に考慮していかないと、大学だけで考えていてもうまくいかないでしょう。

高久：先生がおっしゃるのは社会的ニーズでしょう。ただ頭の中で言うことじゃなくて、理念とか何とかじゃなくてね。

片山：それでなきゃ、やっぱり文部省もオーケーしてくれないですよ。本当のことを言って。ここは文部省が実の親の大学で、私立じゃないんだから。

本田：ひとつ皆さんで力を合わせて。

高久：なぜ新設医大に看護学科を持ってきたかということをよく考えてみる必要があると思いますね。

飯田：平成2年度に金沢で国立大学医学部長会議があった時、医学教育課長から、コメディカルの4年制教育について、大阪大学に調査を依頼しているとの話がありましたが、その時は、広島大学の保健学科新設の話さえなく、新設医大への看護婦養成機関の設置は、当分ないと思っていました。ましてや新設医大のトップをきって富山医大に出来るなんて夢にも思わなかったですね。

高久：だから逆に、昔からの医療短大を持っているところは、頑張り出しますね。

片山：やっぱり何と言ったって、学生を持っているところは強いですね。

山崎：そうすると、山形と佐賀と本学ができて、来年は山梨ですか。

本田：看護学科が医学部の看護学科であるために、医学部長は日夜大変ご苦労なさっているというふうに向っておりますけれども、高い理想を持って頑張っていただきたいと思います。本日は長時間にわたり、看護学科創設準備段階からのいろいろな問題、苦労話などをご披露いただき、またこれから進むべき方向などにつきましても話し合っていたいただき実り多い座談会となりました。どうもありがとうございました。

## 第2節 薬学部創立百周年記念行事

本学薬学部は、明治26年（1893）に創設された共立富山薬学校を起源とし、富山県立薬学専門学校（1910）を経て、1920年には全国初の官立の薬学専門学校に昇格、次いで1949年の学制改革によって富山大学薬学部を引き継がれたが、その後本学の創設に参加し今日に至っている。このように、発祥の共立薬学校から百余年を経過しているが、百年目に当たる平成4年の11月7日に記念式典等の祝賀行事が行われたのである。

当日は台風28号が東日本を通過中のため時折強風があったが、幸いにも降雨は殆どなかった。記念式典は、午前10時より富山県民会館大ホールにおいて、各界からの招待者・卒業生・本学職員など総数約500名の参列を得て盛大に行われた。藤田庶務課長の開式の辞に始まり、狐塚寛薬学部長の式辞、山崎高應学長の挨拶のあと、来賓の鳩山邦夫文部大臣（代理 遠藤純一郎・医学教育課長）、中沖 豊・富山県知事、南原敏夫・日本薬学会会頭、田村四郎・創立百周年記念事業後援会会長から順次祝辞を戴いた。大臣祝辞では、富山県の伝統的産業である製薬業を背景に設置された共立富山薬学校以来、輝かしい功績を挙げながら着実に発展し今日に至っていることを祝し、今後とも特色ある教育・研究を展開し社会の期待に応え、ますます発展されんことを祈念する、と述べられた。次いで各界からの祝電が披露され、45分間にわたる式典を終了した。



文部大臣祝辞

引き続き11時より式典会場において、早石修先生による記念講演「眠りの秘密—プロスタグランジン $D_2$ と $E_2$ による睡眠と覚醒の調節について—」が行われた。早石グループでは、 $PGD_2$ と $PGE_2$ がそれぞれ視索前野と後部視床下部の睡眠中枢および覚醒中枢に局在するレセプターを介して睡眠と覚醒を調節していることを発見されており、スライドを使つての分かりやすい説明に約800名の聴衆は深い感銘を受けた。

午後1時から富山第一ホテルで行われた記念祝賀会には、官・産・学からの来賓、同窓生、本学職員（総数約450名）の参列があった。初めに吉本与一・日本薬剤師会副会長、正橋正一・富山市長、高久 晃・医学部長から祝辞を戴いた。次いで文部省からの来賓、宮地貫一・元文部事務次官、佐藤禎一・文化庁次長、遠藤純一郎・医学教育課長の紹介があった後、田村四郎・記念事業後援会会長から狐塚薬学部長へ創立百周年記念事業資金の目録贈呈があり、森政雄・後援会副会長の乾杯の音頭で祝宴に入った。最後に中富二六氏（昭和5年卒）の発声による万歳三唱で約90分間の熱気のこもった祝賀会を無事終了した。

午後4時からは、薬学研究資料館前に設置された記念石碑「温故知新」の除幕式が関係者多数の見守る中で行われ、全記念行事を無事終了した。なお、石碑の題字は山崎学長の揮毫によるもので、裏面には百年の変遷を要約した年譜が刻まれている。（吉井 英一）



記念碑除幕（薬学研究資料館前）

### 第3節 和漢薬研究所創設三十周年記念行事

和漢薬研究所は、昭和38年（1963）4月に富山大学薬学部附属和漢薬研究施設として発足した。資源開発（'63）、生物試験（'64）、臨床利用（'65）、病態生化学（'69）、化学応用（'73）の5部門が設置された翌年の昭和49年（1974）6月に富山大学附置研究所に昇格し、和漢薬に関する一応の研究態勢が出来上がった。その後、既に新設されていた富山医科薬科大学の附置研究所として、昭和53年（1978）6月に移管され、昭和55年（1980）3月に研究棟が完成（6階建、延2,468m<sup>2</sup>）し、五福から杉谷の地に移転した。平成5年（1993）は創設時から数えて丁度30年の節目の年であり、また富山医科薬科大学附置研究所になってから15年目に当たる。そのようなわけで、研究所創設30周年記念の行事を行う計画を立て、4月頃から準備を進めてきた。

研究所が杉谷の地に移ってから、昭和62年（1987）10月に客員部門である高次神経機能制御、63年（1988）10月には外国人客員部門の免疫機能制御、平成2年（1990）4月に細胞資源工学部門と3部門が増設され、従来までの施設面積では非常に狭隘になってきた。しかも世間の和漢薬研究の重要性に関する認識が高まるとともに、大学院生や研究生が急激に増加し、特に外国人留学生や客員研究員の増加がそれに拍車をかけ、廊下に実験器具がはみ出し、毎年のように消防署から注意を受ける状態が続いていた。8部門になった時点から毎年増築の申請を行ってきたが、やっと文部省の御理解を得て、従来の建物に隣接して6階建990m<sup>2</sup>の増築が、平成5年（1993）8月末に完成した。この年は天候不順で長雨が続き、増築工事が遅れていたが、何とか予定の期日内に間に合った。また、多くの企業の温かい御賛助を受け、30周年記念行事の予算の目途も立ったので、増築完成披露も兼ね、10月1日（金）に記念式典、記念講演会、記念懇親会を、10月2日（土）に富山県と共催の30周年記念「国際伝統医薬シンポジウム

・富山'93」を開催する運びとなった。それと同時に、研究所に昇格して10周年の時に発行した『富山医科薬科大学和漢薬研究所研究業績集（1974～'84）II』の続編として『富山医科薬科大学和漢薬研究所研究業績集（1984～'92）III』と『国際伝統医薬シンポジウム・富山'93講演集』を発刊することにした。幸い記念行事は、学長始め事務局の方々、また研究所職員ほか在籍者の方々の御援助により、無事好評のうちに終了することができた。式典には文部大臣、富山県知事、富山市長の祝辞を頂き、また内外から多くの方々の祝電を頂いた。記念講演会は、薬学系から田中 治先生（広島大学名誉教授・「天然物薬品化学と食品化学の隙間—高機能配糖体の研究」）、医学系からは織田敏次先生（東京大学名誉教授・「治療学の変遷と展望—肝臓病を中心に、和漢薬の応用を含め」）にご講演をお願いした。田中先生の薬品と食品の両視点からの天然物の化学的利用研究、織田先生の治療学と「ヒトのいのち」の問題、共に幅広い観点から現代社会への還元応用のご講話は、多くの聴衆に感銘を与えた。2日目の国際伝統医薬シンポジウムは、1992年8月に開催した「国際伝統医薬シンポジウム・富山'92」に続くもので、中国から6名、パキスタン、カナダから各1名、日本から4名の演者をお招きし、中国医薬学、ユナニー医学、チベット医学、モンゴル医学、その他伝統医薬の有機合成化学、薬理学などに関する話題を御提供いただき討論を行った。伝統医薬研究が世界的に脚光を浴びてきた今日、このようなシンポジウムは毎年、あるいはせめて2年に一度開催してもらいたいという意見が、演者、聴衆の大方の声であった。「このような企画は、国立の和漢薬研究所のある富山であるからできるので、是非継続してもらいたい」というのが外国からの参加者の要望であった。

『研究業績集III』は1984年から1992年までの9年間の各部門の研究業績をまとめたもので、

5,600頁もの大部なものになったが、それだけ研究所の職員及び在籍の学生、研究員の方々が真摯な気持ちで研究を行ってきた結果である。来る21世紀に向かって、より一層和漢薬、さらには世界の伝統医薬の研究に取り組み、本研究所を世界の伝統医薬研究のセンターとして位置

付けたいものと思っている。本行事に際し、多数の企業から賛助資金を頂いた。切に感謝するものである。今後とも皆様方の更なる御支援をお願い申し上げる次第である。

(難波 恒雄)